全教育活動をキャリア教育の視点で捉え直し「生きる力」を育む

京都府 京都市立梅小路小学校

京都市立梅小路小学校は、京都市が推進する「生き方探究教育」を土台に、教科学習や道徳、係活動、地域での体験活動など、全ての教育活動で子どもに身につけたい力を、キャリア教育の視点で捉え直す研究を進めている。地域での体験活動を教科等に計画的に取り入れ、社会での実践力を培い、6年間の体系を重視した指導によって、子どもに「生きる力」につながる確かな成長が見られている。

取り組みのねらい

- 夢に向かって粘り強く前進し、失敗しても諦めない子どもを育てる
- 友だちや保護者、教師、地域の人々に支えられていることを実感させる

取り組みの内容

- 子どもに身につけたい4つの力についてルーブリックを作成し、具体的なイメージを教師間で共有
- 道徳や学級活動、児童会活動をまとめて「梅っ子学習」として系統化
- 係活動にPDCAサイクルを取り入れ、子どもが自分の役割に責任を持って取り組むようにする
- 地域での豊かな体験活動を計画的に行い、学校での学びを社会での実践力へつなげる

取り組みの成果

- 自己肯定感が高まり、自分に自信をもって主体的に学習に取り組み、使命感が育ってきた
- 子どもに地域の一員という意識が芽生え、地域に感謝し、貢献したいという気持ちが強まった
- 教師間の指導への共通理解が進み、指導観や授業が変わっていった

取り組みのねらい

周囲の応援を支えとして一歩を踏み出す力を育てる

京都駅の程近くにある京都市立梅小路小学校は、古都の伝統を守り続ける地域の人々と連携した教育活動を展開している。隣接する梅小路公園や京都水族館、京都市中央卸売市場や昔からある商店街などが、学校だけでは得られない学びの場となっている。加村和美校長はこのように話す。

「学校教育だけで子どもは育ちません。保護者や地域住民には地域ぐるみで子どもを育てようという思いがあり、学校が橋渡しをし

School Data

◎安寧小学校・大内小学校が統合し、1996（平成8）年開校。2013年、キャリア教育文部科学大臣賞受賞。2013年から文部科学省「コミュニティ・スクールの推進への取組に係る事業の調査研究」指定校。

校長	加村和美先生
児童数	263人
学級数	12学級（うち特別支援学級２）
所在地	〒600-8835 京都府京都市下京区観喜寺町３
TEL	075-371-7303
URL	http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=104302
公開研究会	毎年実施の予定（時期は未定）

社会を生きる力を育む――地域、家庭とつくるキャリア教育

て協力をお願いしています」

同校の子どもは素直で優しく、課題には前向きに取り組む気持ちが強いが、困難にぶつかるとすぐに諦めてしまうことがある。

「夢に向かって粘り強く前進し、失敗しても諦めずに問題を解決していく子どもを育てたいというのが、私たち教師の思いです。友だちや先生、保護者、地域の人々などの応援に支えられ、子どもが次の一歩を踏み出す力を育てています」（加村校長）

京都市では、保育所・幼稚園から高校にわたり、地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力を育む「生き方探究教育」を推進している。市が育てたい子ども像を示し、各校の裁量で発達段階に応じたキャリア教育を実践している。同校は2011年度から、「生き方探究教育」の視点で全ての教育活動を整理する研究を進め、14年1月には「第2回全国小学校キャリア教育研究京都大会」で研究報告を実施した。

目標は、「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」「見つめる力（自己理解・自己管理能力）」「やりとげる力（課題対応能力）」「向かう力（キャリアプランニング能力）」の4つの力を育てることだ。研究主任の田野早苗先生は次のように説明する。

「文部科学省が『基礎的・汎用的能力』として示す4つの力を、イメージしやすいキーワードとして設定しました。全教科の授業に加え、道徳や係活動、学活など、あらゆる教育活動において、4つの中のどの力を育てるかを意識して指導計画を作成しています」

取り組みの内容

ルーブリックを作成し4つの力を教師間で共有

研究を進めるうちに、教師間で4つの力の捉え方に差があることが分かった。そこで、それぞれの力について具体的なイメージと明確なゴールを共有するため、発達段階ごとのルーブリックを作成した（図1）。

「4つの力は、『○○が出来る』といった形ではなく、『○○しようとしている』というような姿勢や態度として表れることが多いため、評価が容易ではありませんでした。しかし、教師間で評価の基準をそろえなければ、しっかりとした力は育たないと考え、ルーブリックを作りました」（加村校長）

ルーブリックは、指導計画の作成や教育活

図1「生き方探究教育の視点から、めざす子どもの具体的な姿」（抜粋）

			低学年	中学年	高学年
人間関係形成能力	かかわる力	互いを認めともに学ぶ力	表現	・楽しんで話し合いに参加し、自分の考えを最後まではっきりと話そうとする	・自分の考えを進んで発表し、相手にわかりやすく伝えようとする	・話し合いに進んで参加し、自分の考えを根拠をもってわかりやすく伝えようとする
			協働	・友だちの考えを最後まで聞き、よいところを見つけ、仲よく活動しようとする	・友だちの考えを聞き、いいところを取り入れたり、違いを認めたりして、より良くしようとする	・友だちの考えや立場を認め、目的に向かって、高め合おうとする

上記と同様に、課題対応能力、自己理解能力、キャリアプランニング能力についても、「めざす子どもの具体的な姿」を明確にし、教師間で共有した
＊同校の資料から一部抜粋して編集部で作成

京都市立梅小路小学校校長
加村和美 かむら・かずみ
「校長という立場ではなく、人間として、誠心誠意、先生、地域、子どもと向き合いたい」

京都市立梅小路小学校
田野早苗 たの・さなえ
研究主任。「子どもから学び、共に成長したい。笑顔あふれる授業をつくり、ずっと学ぶ姿勢を育てたい」

京都市立梅小路小学校
徳地美穂 とくち・みほ
学力向上部長。6学年担任。「自分が教えるだけではなく、常に子どもから教えられていることを忘れない」

京都市立梅小路小学校
厚地あゆみ あつち・あゆみ
学習指導部長。3学年担任。「自分が楽しんで主体的に学ぶ姿勢を示し、子どもにも楽しんで学んでもらいたい」

京都市立梅小路小学校
山口信也 やまぐち・しんや
情報教育主任。5学年担任。「『こんな学級にしたい』という目標を持ち、実態を踏まえて取り組みを工夫する」

動の中で子どもの成長を捉えることに活用している。また、その内容を基に子どもにアンケートを実施して取り組みを振り返り、指導の改善に生かしている。

道徳や学級活動、児童会活動を「梅っ子学習」として体系化

4つの力を育てる柱となる教育活動の1つが、各学年で年間35時間行う「梅っ子学習」だ。「生き方探究教育」の視点から、道徳や学級活動、児童会活動を捉え直し、各学年の年間計画を作成した。年間計画では、各活動で4つの中のどの力を育てたいかを明確にし、学年間で体系的に指導している（**図2**）。

学力向上部長・道徳主任の徳地美穂先生は、「梅っ子学習」を通して育てたい子どもの姿について、次のように話す。

「『梅っ子学習』の範囲は広範ですが、高学年の道徳でいえば、失敗しても頑張り続ける大切さを学び、最後まで諦めずに夢やめあてに向かえる力などの育成に重点を置いています。例えば、駅伝の練習では、参加した全ての子どもが1日も休むことなく走り続けた姿などを見て、確かな成長を感じました」

道徳で培った頑張り抜く力は、学力の支えにもなると考えている。

「苦手な教科や難しい問題に対して、どれだけ踏ん張れるかが大事です。自ら頑張ろうとする内発的な意欲がなければ、どれだけ教師が働き掛けても持続しません」（徳地先生）

道徳は自分と向き合い、深く考える時間であり、新たな自分に気付いたり、友だちの異なる一面を見付けたりする機会にもなる。ある子どもが本音を発言したのを機に教室に温かい雰囲気が生まれたり、教科の授業ではあまり活躍できない子どもが率直な気持ちを表現したりすることもあるという。

図2　「梅っ子学習年間計画」5年生（抜粋）

	5年	かかわる力	見つめる力	やりとげる力	向かう力
4月	【児童会】梅っ子集会…1年生を迎える会	○			
	【道徳】「あいさつっていいね」《ともだちの日》	○	○		
	【学活】こんな高学年・学年になりたい		○		○
	【学活】係活動を決めよう	○			
5月	【学活・道徳】憲法月間の各クラスのめあて《ともだちの日》		○		○
	【児童会】梅っ子集会…委員長任命式・フレンドリーグループ顔合わせ	○			○
	【児童会】運動会係活動	○	○	○	○

行事ごとにどんな力を育てたいのかを示した計画表。学年ごとに作成している
＊同校の資料から一部抜粋して編集部で作成

PDCAサイクルを取り入れ失敗も糧になるとして見守る

係活動では、PDCAサイクルを強く意識していることも特徴だ。年度初め、学級で話し合って必要な係を決め、自分に合ったものを選ぶ。学習指導部長の厚地（あつち）あゆみ先生はこのように話す。

「『梅っ子学習』で決めた学級目標を念頭に置き、『より良い学級にするために』という視点で話し合います。自分たちが必要と考えたことなので、係活動にとても前向きです」

「生き物は毎日皆で世話をする必要があるから、係ではなく当番にしよう」といった意見が出ることもあれば、「こんな係があったら皆が楽しい」という思いから、給食の配膳時間に皆を楽しませる「お笑い係」、学級の一番を認定する「ギネス係」などが発案されたこともある。

係が決まったら、思いや見通しを持って計画を立て（Plan）、友だちと協力して主体的に活動し（Do）、活動を振り返って次の目標を立て（Check）、より良い改善策を考える（Action）という流れで取り組む。

「最も重視しているのは振り返りです。これによって次の意欲が生まれ、活動内容が改善されます。学級に貢献するのが係活動の目的ですから、自己評価だけではなく、友だちに『楽しんでもらえたか』『学級のためになったか』といったアンケートを取って振り返るようにしています」（厚地先生）

係活動は子どもの自主性に任せているため、教師が計画の実行は難しそうだと思っても、そのまま進める場合も多いという。

「失敗も経験しなければ、自ら気付いて改

善することはありません。学校での失敗は、社会に出る前の貴重な経験だと捉えています」（田野先生）

低学年から責任を持って係活動に取り組むことで、学年が上がるに連れて委員会活動や児童会活動、学校行事など、より責任の重い役割を果たせるようになる。

「上向きのスパイラル状に高い次元の役割を任せていき、その先には、社会における役割があると考えています」（加村校長）

豊かな体験活動を通じて地域の一員という意識が芽生える

地域の教育資源を活用した体験活動も積極的に行っている。

例えば、5年生の「総合的な学習の時間」は、「どうして人は働くのか」を考えさせることから始まる。この段階では実感のこもった考えは出てこないが、あえて疑問を持たせた状態で、市の教育施設における「スチューデントシティ（＊）」や地元の商店街などで体験活動を行い、自分なりの答えを見付けられるように促す。そうした体験をした上で、地域で働く人や自分を見守ってくれている人にインタビューをし、敬意や感謝の言葉と共に発信する活動を行う。5学年担任の山口信也先生は次のように話す。

「例えば、毎日、横断歩道で見守ってくださる方の思いを知り、自分が多くの人に支えられていることに気付き、感謝の気持ちを抱きます。そのように地域に目を向けるきっかけを与え、地域と子どもを結び付けることは、学校の大切な役割と認識しています」

この他、学区内の施設・大学・企業の協力を得て、各学年のめあてに合わせた体験活動を充実させている（**写真**）。地域とかかわっていくうちに、子どもには地域社会の一員という意識が芽生える。活動の振り返りでは、「私のふるさとはここだから、これからも大事にしたい」「将来、ここを離れたとしても、いつか戻ってこられる場所であってほしい」といった声があった。

写真　5年生の環境教育の一環として、地域の化学メーカーの研究者を招いた授業の様子。給食の時間には、仕事や職業観について質問する時間を設定してキャリア教育につなげた

取り組みの成果

高学年でも高い自己肯定感 教師が変われば子どもも変わる

同校では、4つの力を育てる教育活動は、すぐに成果が見られるものではなく、地道に積み上げることで将来にわたって花開くものと捉えているが、徐々に子どもに変化が見られている。

一般的に、自己肯定感は学年が上がるにつれて低下する傾向があるが、同校のアンケート結果では、高学年の自己肯定感に関連する項目が非常に高く、肯定の割合が、「自分の長所・短所がわかっている」92％、「まわりの人の役に立ったと思うことがある」83％、「今、学習していることは、中学生になったときに役に立つと思う」88％となった。

自己肯定感の高さは、地域との関係性の深まりも要因の1つと捉えている。

「子どもの姿はとても落ち着いていますが、地域に温かく支えられているからこそ、安心して自分の力を発揮できるのでしょう。本校児童の地域行事への参加率も高く、これは『自分も地域を大事にしたい』という気持ちの表れだと思います」（田野先生）

子どもの変化の裏には、教師の意識の変化があるという。

「子どもに身につけたい力を明確にし、指導の視点を統一したことが、教師の意識を変えました。教師の指導観や授業が変われば、子どもが変わり、学校が変わります。先の長い取り組みですが、『子どものために』という思いを最優先にし、地域と共に子どもの成長を支えていきます」（加村校長）

＊京都市の教育施設「京都まなびの街生き方探究館」において体験できる公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本のプログラム。銀行、商店、新聞社、区役所などから成る「街」で、児童がそこに勤める社員や職員と消費者の両方の立場を経験することにより社会や経済の仕組みについて学ぶ。事前学習を含めたトータルの教育プログラム。